

トアミノフェン (22%), 生物学的製剤 (bDMARDs) (6%) であった。

【結論】SAPHO 症候群は、皮膚病変先行型のほうが多いものの、骨関節病変先行例も 18% 存在していたことから、胸鎖関節炎を伴う皮疹のない骨関節病変には注意が払われるべきである。

### 3 抗 MDA-5 抗体陽性皮膚筋炎にともなう間質性肺炎における IL-15 の役割

高田 俊範<sup>1,2</sup>・吉澤 和孝<sup>1</sup>・木村 陽介<sup>1</sup>  
大橋 和政<sup>2</sup>・林 正周<sup>1</sup>・菊地 利明<sup>1</sup>  
佐藤 慎二<sup>3</sup>

新潟大学呼吸器感染症科<sup>1</sup>  
同 魚沼地域医療教育センター<sup>2</sup>  
東海大学リウマチ内科<sup>3</sup>

【背景と目的】抗 MDA-5 抗体を有する筋症状に乏しい皮膚筋炎 (ADM) 患者は、時に致死的な ILD を発症する。抗 MDA-5 抗体価は、生存例・死亡群のいずれでも治療にともない減少し、ILD の病勢とは並行しない。そこで、抗 MDA-5 抗体陽性 ADM に伴う致死性 ILD の進展に関わる炎症・免疫学的変化を明らかにする。

【方法】2000 年から 2017 年 3 月までに、当施設と魚沼基幹病院で治療した抗 MDA-5 抗体陽性 ADM-ILD の臨床記録を後ろ向きに調査した。サイトカインパネル解析を用いて、38 種類の血清サイトカイン濃度を測定した。はじめに、治療前

の各サイトカイン濃度を生存者と非生存者との間で比較した。ついで、複数回血清が保存された患者を対象に、治療中のサイトカインレベルの治療中における変化を調べた。

【結果】27 人の患者が、この研究に登録された。呼吸不全以外の原因 (TTP) で死亡した 1 例を除く 9 例と、生存群 17 例を対象としてサイトカインパネル解析を行った。治療前のサイトカイン濃度を比較すると、血清 IL-15 が非生存者で生存者より有意に上昇していた ( $p < 0.05$ )。生存者の 11 名、死亡患者の 6 名で、血清が複数回保存されていた。これら 17 名を対象に、各サイトカイン濃度の 1 日あたりの変化率 (傾き) を算出した。治療期間における各サイトカインレベルの傾きを比較すると、非生存者では生存者に比べ IL-10 および IL-15 の傾きが有意に増加していた (いずれも  $p < 0.01$ )。

【結語】IL-15 および IL-10 は、抗 MDA-5 抗体陽性 ADM-ILD の増悪に重要な役割を果たしている可能性がある。

## II. 特別講演

### 成人自己炎症性疾患の診療

横浜市立大学附属病院

血液・リウマチ・感染症内科

講師 桐野 洋平